



桃洞遺筆

第肇輯

卷下



特別
五一
4263
3



二
4263
3



桃洞遺筆卷之三目錄

椿つばき 附 山茶花さんぢあな

蓑衣虫みゆいむし

燒芽楮やぶやなぎ 附 圓珠楮えんじゆぢ

名護蘭なごらん

蛇足よそぎ

附錄

羶鹿じやんろく 附 羚羊れいぎやう 山羊さんやう

北凡きたん 附 月明凡げつめいん

水仙梅せんすいばい

治馬ぢま 螭りゅう 噬人方しにんぽう

食巖虫しょくがんむし

青魚せいぎよ 附 二親魚にしんぎよ

冬虫夏艸とうちゆうかすう

麀しゆう

野槌蛇のづちへび 附 千歲蝮せんさいぶつ

桃洞遺筆卷之三目錄



手蔓藻蔓

都鳥



桃源遺筆卷之三

紀伊 小原八三郎源良直 録

椿 きんえ 附山茶花

椿 音丑 禹 左 樵 說 樵 字 皆同字なり和名玉ツバキ

又キヤンチン又チヤンチンといふ本邦もとより多

きり此形まども昔人識じて唐山より種を取よせ

黄蘗山に栽しやいふ木高く聳え木理細膩よして白

實皮爾縱紋のり樹梢枝と繁く分ち春新葉と生は漆
の葉は侶く長く雌木ハ五月長穂と那く南天竹の花
は似多白色那り秋は至り實熟く形連翹小似る圓
長自ら豎は裂く松實の如きも此風小從ひて飛ぶ本
草綱目尔此莢形長く鳳眼小似る也鳳眼草といふ
とあり山茶花を伊藤長胤の秉燭譚は曰椿ヲツバキ
ト訓ズルハ本ヨリ誤レリ莊子ニ大椿ノ一アレバ後
世其花ヲ稱スルヲキカズ近年平井徳建氏ナド本
草ヲ檢テ云山茶花ト云モノ即日本ノツバキ也ト其

後物産ノ説詳ニメ山茶花タルヲ愈明ナリと有り是
説尔從ふべし山茶花ハ品類甚多し花史左編群芳譜
秘傳花鏡等小詳なり本邦小く椿をツバキト訓むる
ハ其誤を來ること久し唐山小も知る草木藥方雜
記小日本山茶花其國名為椿不名以山茶也といひ其
下は白者以白玉最白玉一種花大色白而香香如我里
白百合花之香開放于二月次則唐笠也白妙也在高
根則又其次也至于白菊六角之類花朵小不取焉紅者
以中為最花大而香加賀牡丹甚佳花色太紅如牡丹花

辨邊或有吐露白邊者次則大紅牡丹與渡守春日俱妙
 雜色最佳者莫如有川其白上有紅色如雲朝露其色紅
 有白點者亂拍子亦然有薄衣色如醉楊妃者有大江山
 一本有三四色者有三國一本乃三色者有玉簾一本四
 五色者尚有浦山開荒浪鳴戶關戶金水引皆為上種有
 加平牡丹唐絲鏡山唐椿山海牡丹諸種皆其下者共有
 五百種有一種天下奇開花朵色百樣其國內亦少不可
 得者有一種名五寸といへり此下に植様接木の法も
 又書紀 天武天皇十三年三月癸未朔庚寅吉野

人字閑直弓貢白海石榴とて、こ終は白ツバキと訓
 をつけり、和名鈔小云海石榴和名豆波木とあり共
 大なる誤りなり海石榴ハ朝鮮サクロなり、
 直接は或説小海石榴とツバキ小充るこせハ即山
 茶花の一種花小く、大さ海石榴花の如く蒂ハ
 青く、筒辨をむけの孤俗小ワビスケと名、
 漢名海榴茶 明の楊升菴文集 海紅花といふ、
 石榴と、遂は混と誤るなりといふ、志るるべ
 又藝花譜の茶梅花ハ、サバシクワなり、これと誤

梨多ツバキと充る説も有り

水仙梅

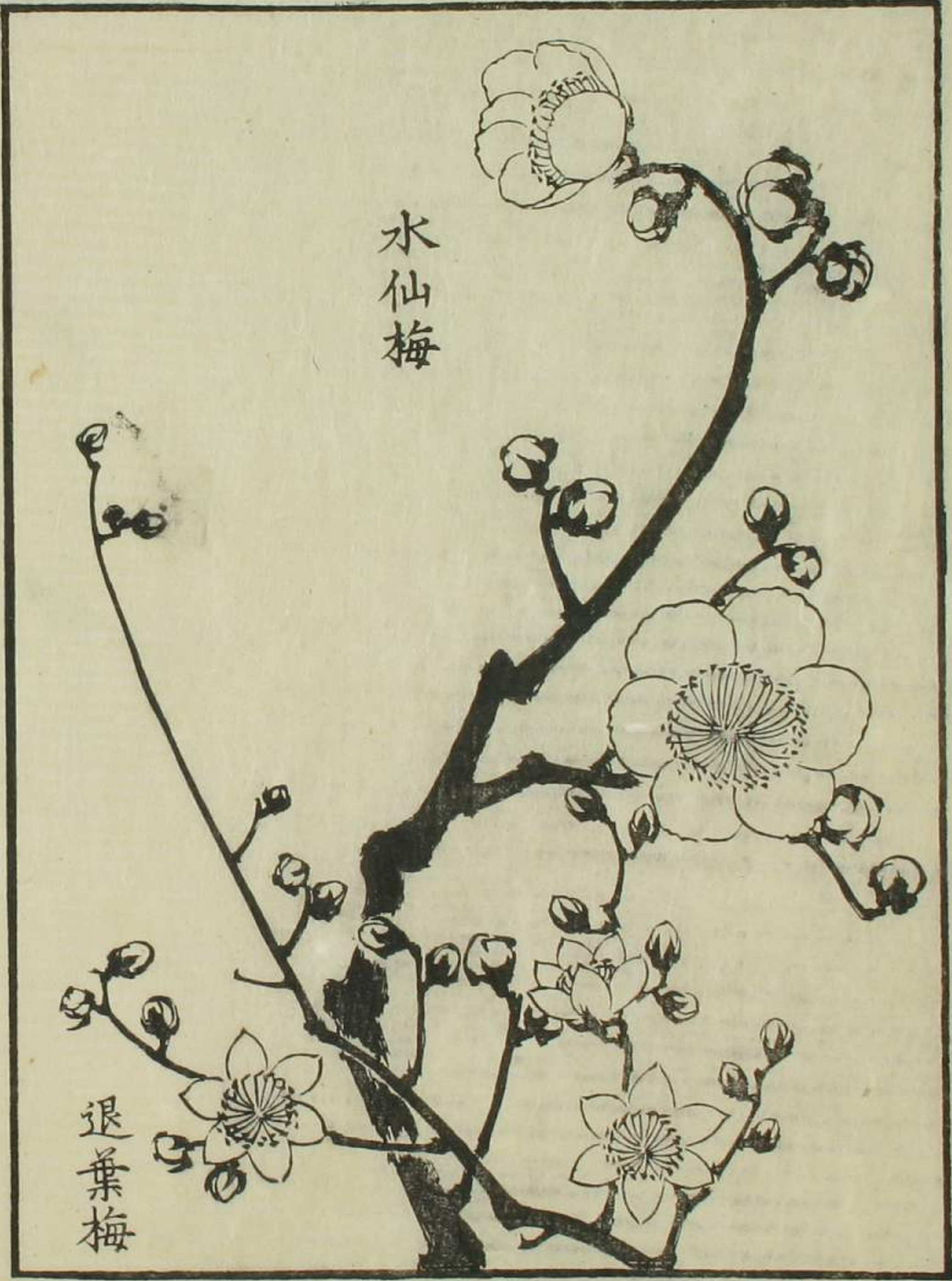
水仙梅ハ、單瓣白色小して形最大なり、六瓣なるとも
 六瓣梅ともいふ其香尤勝なり、俗小其花六瓣也
 水仙梅と名くと、水仙花單葉の者ハ、六瓣也、本草
 其香水仙花に似る也、名くと、直接小此説非なり、
 或ハ、花純白小く後微く淡紅を帯る也、小醉仙
 梅と名くといへり、按、廣東新語の説によれば、水先
 梅と書も可なり、其文曰、瓊之州比年梅花六出

出字音 經見于

丹鉛錄 及群芳譜

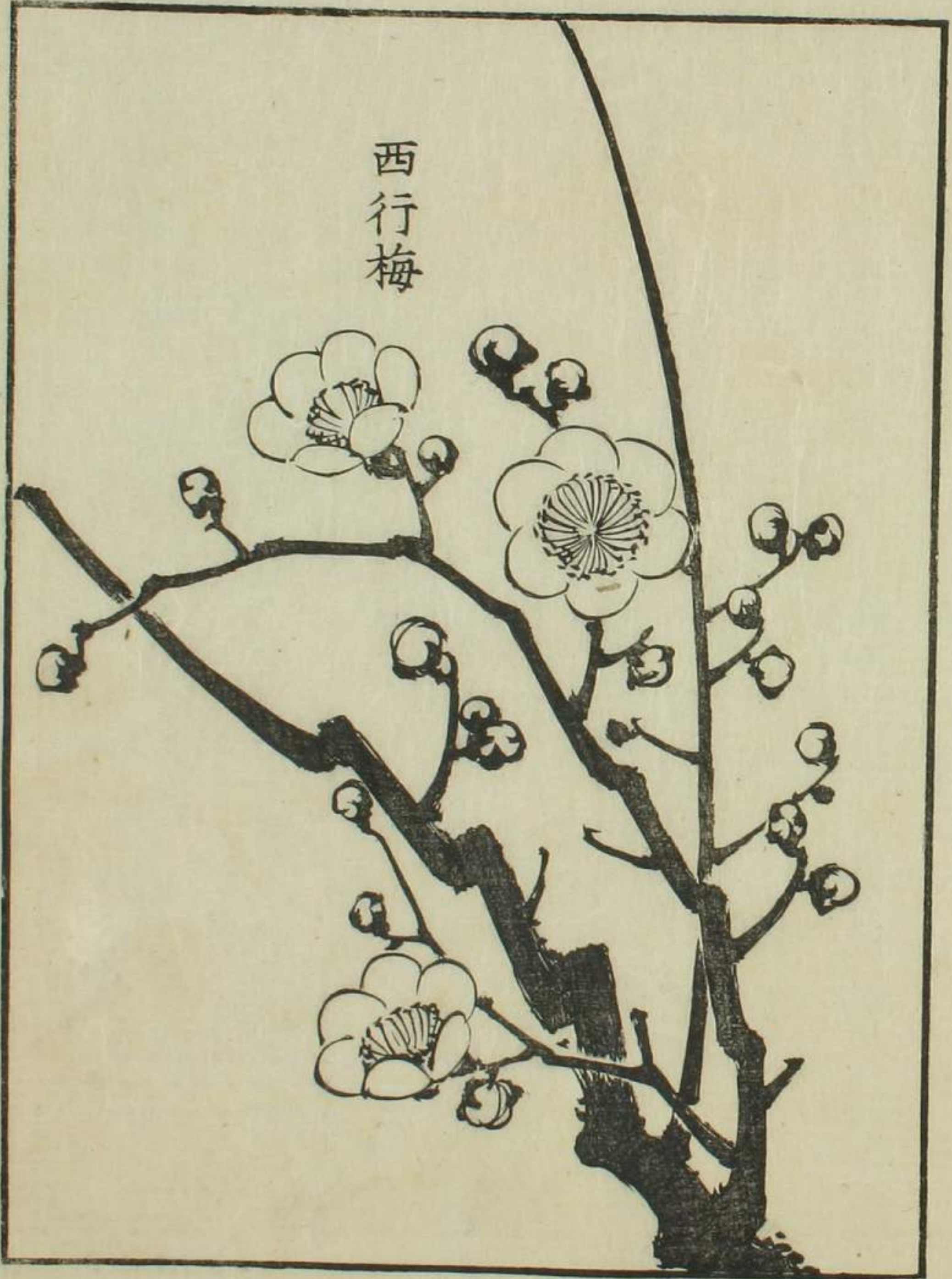
予謂梅花五出者也、五陽數也、冬至一陽始復、梅即吐花
 得陽之先者也、今六其出則得陰數矣、蓋以地氣而變、若
 於嚴寒故不用其五而用六、同於雪花也、以梅花為體、以
 雪花為用、使人見以為雪花則梅也、以為梅則雪花也、人
 見其六而不見其五、其五在六之中、猶河圖之五在十中
 也、且也、河圖之一生水、梅得水氣之先、故花於冬至與雪
 同時、雪者水之氣所凝、梅者水之形所結、其卦皆為坎、坎
 為水、水在天而未至乎地、而先凝為雪、先天之水也、水在
 地而未上乎天、而先發為梅花、後地之水也、水之數六、寒

此同書筆卷之三



水仙梅

退葉梅



西行梅

極則雪花與梅皆六其出應其數也北方地寒以煖為祥南方地煖以寒為祥瓊州之梅早以煖也其六出以寒也
是乃祥也と有り又孝豐縣志小鄆南十八景張九皐鄆笑尋梅詩の注尔鄆笑山梅花六出といへりいげ本邦までも唐山までも南方小多く産するところ由本州
よへ處くよこれ有り

直接今種樹家多く有る六瓣梅ハ紅白の二種あり皆單瓣より形梅より小く其瓣細く先尖至每瓣の間退き重らざるの退葉梅とい

ひ又軒端梅といふへ千葉より形ち小く四其辨圓一先尖らば辨重るの西行梅といふて別よりこれ二種ハ稀五瓣七瓣のをれも雜て開く真の六瓣梅より

蓑衣蟲

清少納言枕の草紙といそくみ折むいせあそりなりか小れうとけきばおやよにそこれもおそりき心ちぞわらんこそおやのあし衣ひきそそ本抄本形ど小つりき衣今秋風ふらんおそり

んをるまぐとてひきにげていゝ々々も〜〜風
 れおとき〜去り〜八月をうり〜ねきバ、ち〜と
 こりねげ小なく、いみどくあられたり又夫木鈔此故
 幸とよめる寂蓮の歌あり契て々々親のこ〜詠もあ〜
 秋うであれむ。みのむ〜此こゑ
猶數多あり又宗
 碩の藻塩草も
 あり〜
 按〜蓑蟲二種あり、一種ハ初木葉の芽
 出し〜つれ食ひ葉の筋と残〜口より絲と吐き身と
 中に綴り絡ふ此の如く〜多く重孫巢をつく内虫
 成長〜大さ一寸をか里木の枝に附〜下〜垂る後

羽化〜蝶とぬる、六種真物なり、一種ハ形相似〜木
 の枝〜つり地を〜、真物ハ一方より頭と出〜こ
 終〜首尾より出歩と同類別種なり〜蓑蟲ハ唐山
 に〜諸名有り、晋の崔豹が古今注に曰結草蟲一名結
 葦好於草末折屈草葉以為巢窟處〜有之、
宋の馬縞が
 中華古今注
 同文
 ○宋蘇軾が物類相感志小曰芝蔴柴掛樹上無蓑
 衣也○抹蘭雜誌に曰結草蟲一名木螺一名蓑衣丈人
 以上〜同物なり

直按〜蓑蟲ハ、枕草紙より古く、宇津保物語よ〜え

梅の花笠の巻云。上略。乃宮に給ひて。みのむ
いはく。花をら給ひて。そをぐ。あにうさだせ
たる。それども。かくうきは。あや。うくれ
さる。みらされ山の。これむ。ハ。花のぬるを。や。婦る
といふらん。とあり

治馬蜚人

清の韓則愈。雁山雜記云。雁山春夏多馬蜚。毒物。善
啗人。流血不止。以燒竹葉塗創。血立止。今淡竹葉。と燒
て試るに。極く効有り。馬蜚一名馬蛭。蛭字。證類本草
音質。事物紺珠

音只。廣韻音壘。和名ウマビル。古又クマビル。今少いふ。梅天
多く出る。大なるハ三四寸許もあり

燒芽楮 附圓珠楮

夫木和歌。鈔。為家卿の歌。冬。くれら霜。といふ。く
らむ。わ。れ。木。わ。いの。すぐ。た。や。い。も。み。お。ら。ん。といふ
是。ち。り。又。略。バ。メ。カ。シ。も。バ。メ。と。も。い。ふ。人。家。庭
際。多。く。植。る。熊。野。山。中。ハ。自。生。多。く。大。形。る。り。の。高
さ。數。丈。に。至。る。き。り。薪。上。品。ち。り。九。州。に。ウ。バ
シ。バ。と。い。ふ。楮。の。屬。小。葉。厚。く。長。さ。一。寸。許。楮。と

直云予友實志致
患う竹窓雨詰初
編み杖荒本草の
石岡様をひきま
うんよ充りま
うんよ

鋸齒あり對生、冬凋ま、花ハ馬酔木の如く、又櫛
の花小似、黄穂を、後小櫛の如き實と結ぶ、小兒
採て火小煨、食ふ、漢名詳り、形、圓葉櫛の名、
きども、漢名、文政辛巳の春正月、熊野浦、江
南の蘇州府、崇明縣の商舶、漂流、來、其舶中の王壽
珍といへるも、此樹を尋に、刺櫛と答へり

直云、先年或人予に語、圓珠櫛といふも、ハメ
櫛、とく、的當、圓葉櫛ハ圓珠櫛の誤るべき、
されど、其出書と忘る、りといへり、按、明の何孟

春、餘冬序録の外篇、圓珠櫛との、其文に、櫛樹
歳結子、其子小者、小於榛、味如之、大者大如榛、而味苦、
土人取為果實、謂小實者為圓珠櫛、大者為苦珠櫛、以
此、今二種、其材固無異也、といへり、これハ櫛の小實
、食ふべきものなり、ハメ櫛ハ充ら、尙後
考とまり

食巖蟲

本州熊野浦、神浦、海邊、石上、巢をつく、土人、石喰、
といふ、形、白膜子、衣の如、小、小なり、其中、大、二

食巖虫

表



裏



分許の蟲あり、形圓扁に、八足前螯長、全身淡嵐色なり、土人の説、此蟲たゞ此石をのみ喰ふといふ、其石を軟く、嵐色なり、石面小蟲の喰跡も見る、全く波濤よく蟲蝕の形をなれ、予此石を鉄夾にて彼虫を入畜ふるに、日久くして尚活動は顯微鏡を用ひ、此蟲を寫出ると、右に圖とるが如し、漢名いまだ考へば

名護蘭

琉球より來る、名護嶽に産するもの、名く今花戸

多し、生樹の枝幹へ着棕鬚の毛やどふく結つけ置
べ、皮へ根を纏ひ驚るものなり、又杪樞へ着く能生也。
苗の高さ七八寸、茎棒蘭に似く巨く葉ハ藤撫子の葉
小侶く長く滑かり、五六月一幹と抽く梢小花を開く。
七八朶攢生し、形風蘭の花に侶り、其色蒼白なり、清
の徐葆光が中山傳信録に、名護嶽山上有萬松院、出蘭
葉如桂、抽箭如蕙、攢花如蘭、香更烈、稱名護蘭といふ是
なり、古説に、天台山方外志の長生草、一名仙人指甲蘭
を以て名護蘭と充る、一穂如く、一種花姑と大葉の

名護蘭といふもれあり、花葉ともに常品より大なり。
按小琉球畧記に、壽蘭葉名護蘭ノ如ニメ大ク、幹長ク、
花モ名護蘭ヨリハ莖長ク咲キ香高シといふと同物
形もなり

直云山岡恭安の本草正偽に、名護蘭出雲州多ク
産スといふ、其實否と云々、
附二親魚

青魚

本草綱目、青魚、邵武府志曰、頌曰、生江湖間、南方多有、
北地時或有之、取無時、似鮫而背正青色、明の廊露が赤
雅曰、色青黒、大

者百餘斤。南人多以作鮓。古人所謂五候鯖即此。五候鯖ハ漢の劉歆が西
京雜記其頭中枕骨蒸令氣通曝乾狀如琥珀。荆楚人煮
 拍作酒器梳篦甚佳。舊注言可代琥珀者非也。とあり。此
 魚何物乎。詳々々々。本邦小々。サバのことを青魚或ハ
 鯖と書と故。和名鈔。鯖音青。和名阿乎佐波といひ。
 本草和名。鯖組。經反。和名佐波といふ。俱々非なり。サ
 バ。譯傳雜字簿。青花魚とあり。直云サバハ扁サバ
あり。予南海魚譜と著。一々。青魚同名あり。朝鮮よりハ
詳々々々。小のサバカドを青魚といふ。故。東豎寶鑑。青魚と載。頌此

説を引き。其下。非我國之青魚也といへり。カドハ常
 陸國誌。河海交処多出といひ。採藥使記。此魚アツ
 マル所沫ヲ吹テ水面ニ浮ム。雪ノ降タルガ如シ。網ヲ
 以テ是ヲ捕ルと。松井玄蕃いへり。本草啓蒙云。カド
 ハ一名ニシシ。高麗イワシ。筑前セガイ。朝房總常興羽
 州殊ニ南部津輕蝦夷ニ多シ。九十月ヨリ春ニ三月ニ
 至マデ採ル。春採者ヲ良トス。冬採者ハ油ナシ。大ナル
 者ハ一二尺形。鯔魚ニ侶テ扁ク。又青花魚ニ侶テ眼大
 ニメ赤ク。夜光アリ。鱗薄軟ニメ落易シ。捕レバ速ニ自

ラ脱スダツ色青シテ光アリヒカリ肉ハ脆ク美ニメモロ紅色ヲ帶ズアカイロ
 細刺多クメコボ子鯧魚ノ如シイワシ炙リ食メ味ゴト鯧魚ニ勝レリアヂイワシ或
 ハ鮓ト為スシ或ハ糟藏スカスネ南部方言ニカドノ背肉ノセウラ乾
 タルヲニシント云全ク開テ乾タルヲハニシト云味カクシ
 美ナリ津輕ニテハ生者ヲニシント云冬ニシナマナルモノン春ニ
 シンノ名アリ脊肉ノセウク乾タルヲ磨ニシント云全クカクシ
 乾タル者ハ京都ニ来ラズ脊肉ノ乾タル者ハ多ク来オホ
 ル賤民ノ食トシ又猫ノ食トス其子ヲカズノ子ト云セウク
 一胞細卵數ナシ風乾メ四方ニ出スイッハウ新オホきもの黄白色カクシ
上品と云陳きも

の紅黒紫色モチ用ヒテ歳首及ビ嫁娶ノ祝具トストシハジメ子孫繁シウグ
 栄ノ義ニトル又カドノコノ轉語也エイ氏云フ數胞ヲ合テシゴウ
 テ形ヲ正方ニコシラヘタルヲヨセト云ヒ又ヨセカカタチ
 ズノコト云形扁長ニコシラヘタルヲノシカツノコカタチヒラナカ
 ト云フ又生子を塩藏マキ又ツケカズノコトケコ呂氏春秋ニ魚之
 美者東海之鮓ト云ハカズノコナルベシとあり按ナル
 昔むとより鯧イワシと書クカズノコカクシ或ハ鯧イワシの字カ
 ドド用也鯧イワシの字ハ字書カクシニカえカクシハ集韻カクシニ音東侶カクシ
 鯧イワシハ音煉侶カクシとありカクシと云カクシに詳カクシクカクシハ何カクシの書

よりりカドニ充るや知べうべ

直接ニ新井白石の蝦夷志の注小加登俗用鯨字所
出未詳といへり採藥使記ニハカド和俗鯨ノ字ヲ
用ユ東海ニ出ルヲ以テナルベシと後藤黎春いへ
り

蛇足

畫蛇着足の諺昔より是ありされど明の張鼎思ガ瑯
琊代醉編ニ曲江老兵捕一蛇焼之四足垂出如雞足形
以此知古人有未盡窮之事といへり予此説と信ぜざ

了に先年熊野新宮桃泉寺山の麓ニ一蛇長さ四
尺許の者猫と闘ふ山人こき殺と四脚あり形圖
の如く長さ二寸許指ハなく未



銀針のごとさ四五分許のり
數十縦横は生じ太地浦の
太地氏一脚を藏せし其後
本府の杉山氏乞求り今藏せりこきに張氏の
説妄なりとざること又薩州ニヤマダヘビとい
ふものあり腹より下ニ二足あり物と闘ふとき必

出たと聞き、其實否と云々。又本草、陶弘景の曰、

燒地令熱、以酒沃之、置蛇于上、則足見。○或ハ酉陽雜俎

曰、蛇以桑柴燒之、則見足出。などの説あり。以て試

し

直云、文政紀元の五月、本府の昌平河岸より一蛇を

殺し、長さ五尺許、常蛇と異なることなり。只腹下の

左右鱗腫るる所あり。こゝで裂バ二足あり。長さ

二寸五分許、形、鰭脚の如し。桃泉寺山より獲る。四

足あり。と異なる。薩州のヤマダへビといふもの

類なるべし。其後蛇の足あるものなり。凡そ全く常蛇
とハ別種なるべし。

冬蟲夏草

又夏草冬蟲ともいふ。舶來の者ハ長さ一寸餘、巨き筆

管の如く、色蒼黒、小く、其の方微し、黄色を帯ぶる乾

久くたるもの、恰も柴胡の形の如し。廣川氏の長崎

聞見録、小清高ハ腎藥なりと云々。大小珍と云々。ことと

いへば、此品唐山より古ハなき者もや。康熙己前の

書に載るなり。凡そ呉儀洛が本艸從新に曰、冬蟲夏草、甘

平保肺益腎止血化痰已勞嗽 袁棟が書隱叢説尔曰

夏草冬蟲浸酒服之可以却病延年 徐崑が柳崖外編

曰冬蟲夏草和鴨肉頰食之大補 七十一が西域聞

見録曰夏草冬蟲入藥極熱 魯華祝が衛藏圖識

曰冬蟲夏草性温暖補精益髓 唐秉鈞が文房肆攻圖

説小曰夏草冬蟲保肺氣實腠理功用不下人參以上六

文ハ近年多紀氏が著と暨 按小冬蟲夏草ハ本邦所

所産を陽地ハ絶々なく、江州ハ臭梧桐の根

生ト或ハ地上或ハ土中二三寸もありといふ其

形種々あり近年抽水常盤といふ人觀音寺邊山中

採り出るとその皆其苗口中より出る舶来頭上より

苗出ると異なり形狀下ニ圖をるが如し又熊野より

ハ桑針の本ニ生れ長さ二三寸細き筆管のごとく茶

褐色より能蠕動口中より絲のごとく死者葉生

又文化二乙丑年霽雨の後本府の東北出水村を過

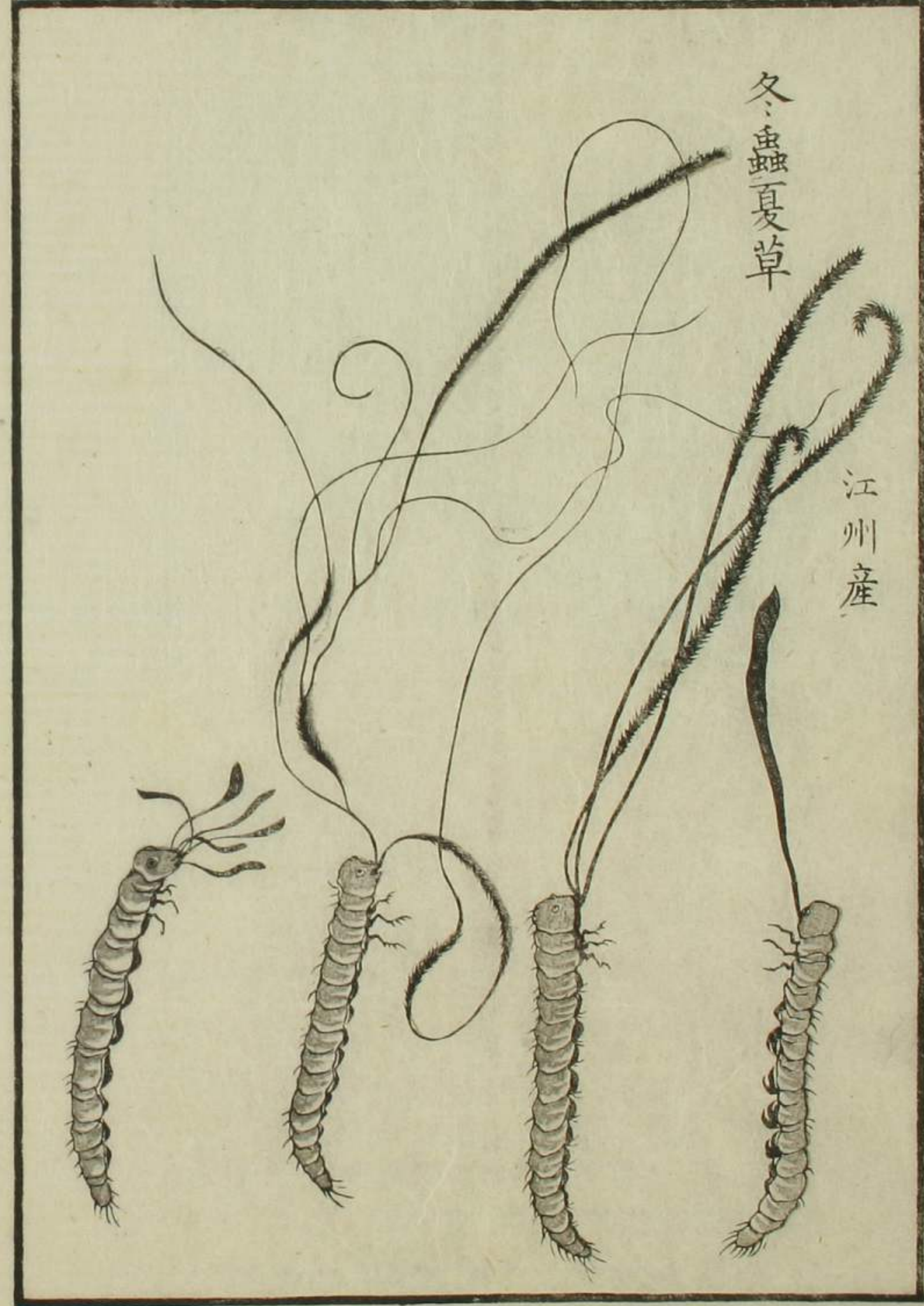
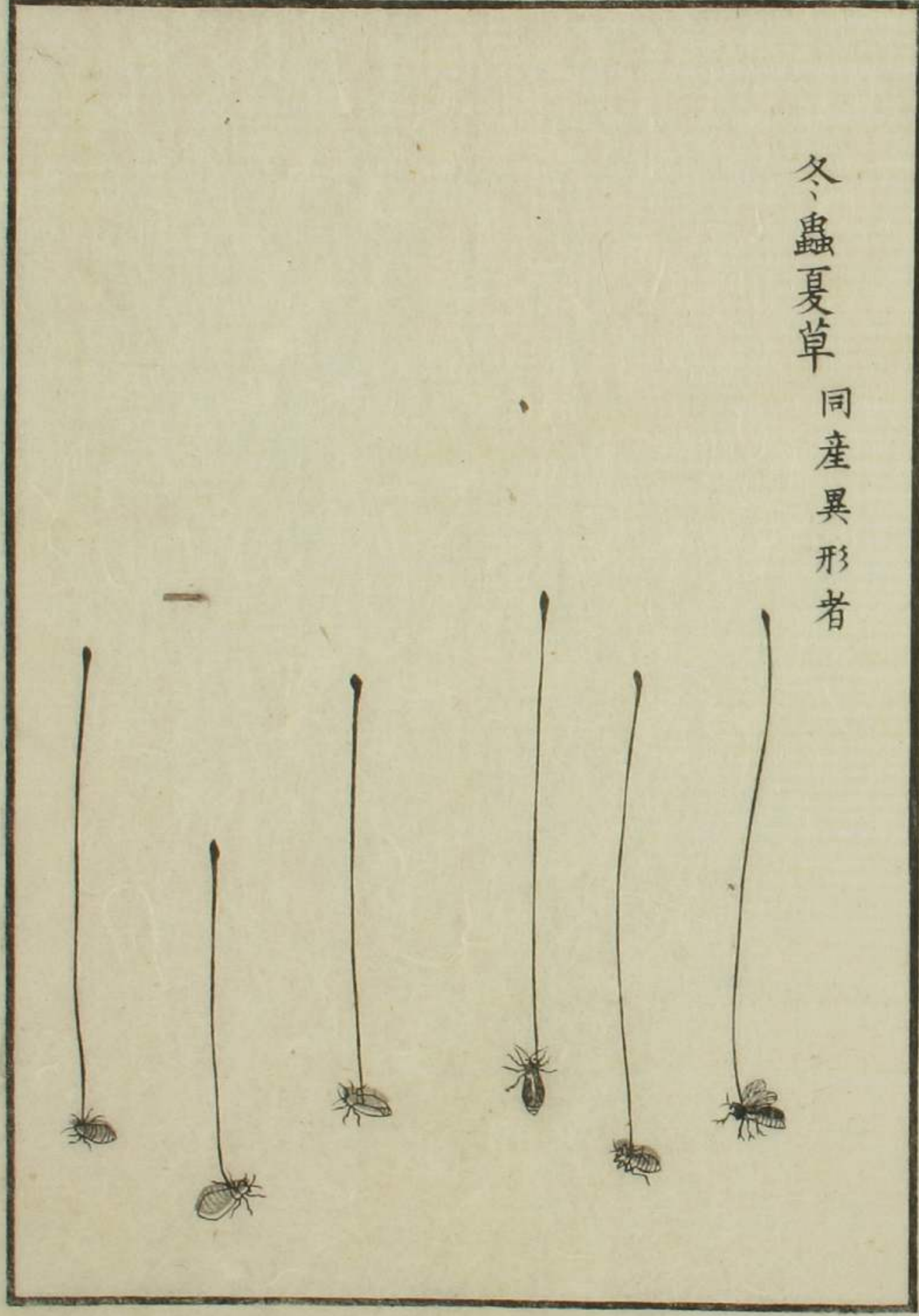
るに溝邊より出たり形油夷に似淡黒色蠕動を口中

より高さ四五寸の葉出たり白茅の如し又文化五戊辰

年六月日前宮國造家の後園より得ものあり形ハ伏

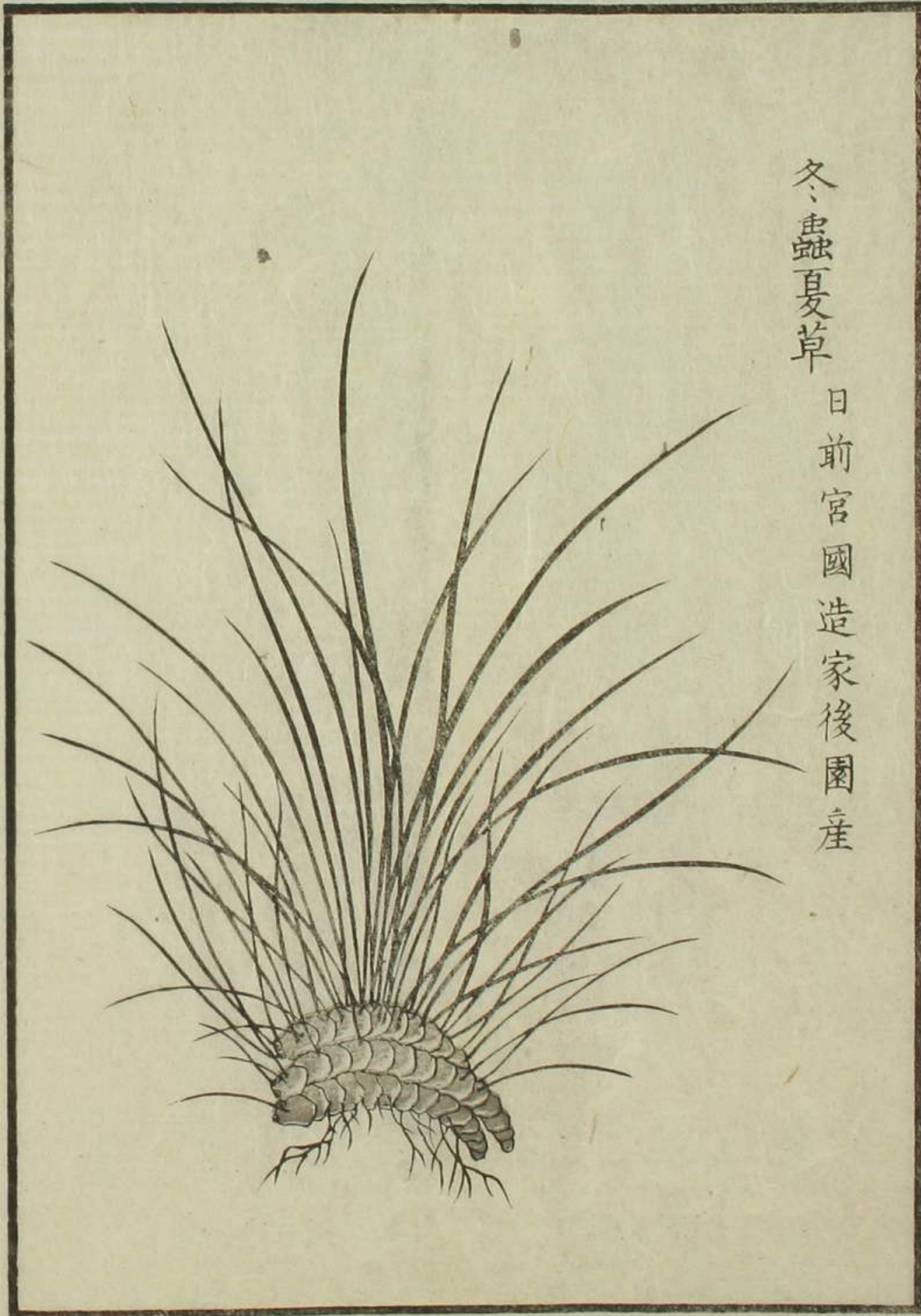
兆同遺筆卷之三

直接ニ粵西偶
記不粵西沈融
谷偶步城頭見
地上一葉蠕動
而行取視之半
已成其半猶
葉也蓋濕熱所
化耳といふも
冬蟲夏草の属
なるべし



冬蟲夏草

日前宮國造家後園産



蜻とらの如ごときまの三さん箇こ重じやうりせ背せくく茅ちやう葉がのごととれまの多おほ
 くあま叢しやうでな生なること上うへ又また圃ぼとるが如ごとく又また加か州しやう又また方ほう言げんケ
 ラヨモギと呼よむものあり形かたち土つち駒こまと同おな形かたち々々首くびより
 艾よもぎの如ごとき草くさと生なじこれ冬ふゆ蟲ちゆう夏か草くさの屬しゆたりといふ予
 いまぶ此この品ひん々々此この餘あま諸しよ州しゆうと探たん索さくせば尚なほ種しゆ類るい多おほく
 々々々

直ちよく云い文ぶん政せい七しち甲かう申しんの秋あき八はち月げつ筑ちく前ぜん福ふく岡おか伊い丹たん氏しの庭てい中ちゆう
 々々冬ふゆ蟲ちゆう夏か草くさ二に三さん十じゆう本ぼんも聚あはり生じこれ形かたち宛あやも蟬せみの如ごとく
 全ぜん躰たいハ根ね々々形かたち水みづ松しょうの如ごとき高たか々々三さん寸すん許この草くさと

頭上くわんじやうニ悉しつく生なまじりと聞きき。予よ按おはな疑ぎらくはこれ冬ふゆ
蟲夏草ちゆうかそうニ何なにれん。和名わなセシ夕ゆふケ又セシノキ江江と呼呼よ
ものい即すなはち本草に載のる蟬花一名冠かん蟬の宋の宋の祁祁
ガ益部あきふ方物ほうぶつ記に蟬花蟬花之不蛻れ者至秋秋則則花其頭頭長長
一二寸一黄碧色黄碧色治治小兒瘰癧小兒瘰癧又能已已瘡瘡といふもの是
ちるべし

桃洞遺筆卷之三終

附録

小原良直 著

羶鹿 附 羶羊 山羊

羶鹿じやんろくハ古名こなカマシカマシノ書紀しよきル。皇極天皇二年冬

十月の童謡わがうたニ伊波能いはの杯は爾に古こ佐さ屢る渠を梅うめ野の俱ぐ渠を梅うめ多た你に

母多もた礙が底て騰と衰せ囉ら栖せ敵か麻ま之の二に能の烏う臍しといふ是はちり一

名なニクク又またクラシシノ信しん州しゅうカマシカマシカカ本朝ほんてうシマジカシマジカ薬やくカモカモ

シカシカ俗しやくアラシアラシノ南なん部ぶカベトリカベトリ飛と州しゅうカベカベ同どうかどの名なあり

谷川士清たにがわしせいの書紀しよき通證つうていル加毛かみ之の謂い羶鹿じやんろく也也羶じやんの古名こなと

與冬瓜云加毛宇利義同又云爾久以此皮為褥也
 名鈔褥此間途久毛席名也といへて此獸全身黒色或
 ハ褐色或ハ黒褐色小々白斑ある者あり羊の大角
 二角並び生じ長さ五寸許色黒く内空く本は横
 皺多しゆりて外角節あり足下は岩スイ野熊といふも
 のあり能壁立の處に登るといふ和名鈔爾麋羊和
 名加萬之といふ延喜式爾麋羊角とカマシ、ノツ
 ノと訓じ本草和名は零羊角和名加末之乃都乃
 の鑿心方尔加末之とあり故尔今に至る藥店はカマ
 之乃都乃小はくる。

シ、の角と和産の羚羊角と名けらる皆誤なり種
 鹿ハ漢名詳々麋羊羚羊零羊ハ一物と和産
 角ハ船来りて形牛角の如く徑寸餘長さ尺許直
 末微く尖り白色と黄色と帶る節ハ多く
 竹筍の皮と去るが如く末二寸許ハ節あり外
 透明内は巨き心あり木の如く本草綱目は雷敷が
 曰凡用有神羊角甚長有二十四節内有天生木胎此角
 有神力 明の倪朱謨が本草彙言は曰羚羊角白亮如
 玉長七八寸 本草從新は曰羚羊角明亮而尖不黒者

良^シと^シ糴^シ等の文より糴^シ鹿の^シ羚羊^シありざることを知^ルべし糴^シ鹿は夜角と木石小掛^ル臥^ル本草綱目よ、羚羊懸^ル角木上^ニ以^テ遠^ク害^ヲといふ^ル同^シぎ故^ニ糴^シ鹿と羚羊と^ハ然^ルとも角の大小形色皆異^ナると^ハ此^ハ羚羊^ハ決^シて糴^シ鹿より^ハ又^ハ書紀^ニ前^ノ態歌^ヲ載^シ下^ル山背王^ノ頭髮斑雜毛似^シ山羊^トあり^ル此^ハ山羊^ハカマシ、と訓^ヲつけ^テり、これ亦^モ糴^シ然^ルば朝鮮^{ヨリ}ハ羚羊と山羊といふ郷藥本草^ニ出^ル、本草綱目^ノ山羊^ハ和産^ニあり^ル詳^シ本草啓蒙^ニ載^シる^ニに畧^シ充^シ糴^シ鹿^ハ充^ル

るべきもの小^シゆ^ニ又^ハ君山^ノ本草正偽^ル麋^トカマシ、^ハ充^ル大^ニ非^ハなり^ル麋^ハ本草綱目^ニ無^ク角^トとい^ハり^テ往年^ハ水戸黄門義公朝鮮産^ノ麋^ト常陸山中^ニ放^シさ^シゆ玉ふといひ傳^ハる^ニ形鹿より^ハ小^シく黄黒色角^ヲ牙^ヲり^テ野猪牙^ノ如^ク口外^ニ出^ル牝^ニ牙^ヲ耳^ハハ三^ニ分^ニ洲濱草^ハ漢名麋^トの葉^ニ似^テ此^ハ獸^ト朝^ニ鮮^ニノ口^トい^ハふ今^ハ舶来^ノ末皮^ハ即^チ此^ハ麋皮^{ナリ}以^テ上^ニ羚羊山羊麋^ノ三物糴^シ鹿^ハ充^ラば何^カを^リ充^ベき^ヤ考^ベり^ラばと蘭山翁^ハい^ハり^テ予^ハ按^テ清^ノ張綱孫

ガ獸經トウキキウ小羚羊コシヤウヤウと載るの外ほかは麋ミと載る以林テイ而掛角ケカクとあり又康熙字典カンシキジテンに麋ミ音齊シ麋ミ狼獸ロウジュ名似鹿シカ而角向前ツノノミテ入林則挂其角故常在淺草中逐入林則搏之ツクとあり恐ハこれ麋鹿ミカたるべきなり尚後考ナハノチノケンケンをまひ

北凡 附月明凡

近年キンネン讚州サンシュウより一種の西凡セイハンを出イデ白西凡ハクセイハンといふ形常の西凡セイハンより皮薄く白色ハクシキの麋ミ子シともニ紅色ベニなり味至アチ甘美カンミ常品ジョウヒンに勝る按アツ群芳譜グンホウポ西凡セイハンの附録フキに北凡ホクハン形如西凡カタシテセイハン而小皮色白甚薄シテナカク飄ヒラ甚紅ベニ子亦如西

凡ハン而微小狭長味甚甘美與西凡セイハン同時想亦西凡セイハン別種也といふ即是なり又今世上イマノセノチは白西凡ハクセイハンと呼ヨぶのあり皮白色ハクシキ小く飄淡黄色ヒラタンキウシキなりこれと明メイの李リ中立チュウリが本草原始ゲンシに載る月明凡ゲツメイハンと北凡ホクハンと別なり

野槌蛇 附千歲蝮

嘗シ聞ク和州吉野山中本州熊野クマノ奥等ウチノミチノミチに産ウツはれ其形ハ長さ二尺餘頭尾均く尾尖シラらば槌ツチの柄エなきがごとく全身ゼンシン蝮蛇ハクシの如く口大く能人ノウジンを嚙カむ甚毒ありといふ古説コトワザ千歲蝮センサイハクシは充アまども本草綱目頌ショウの

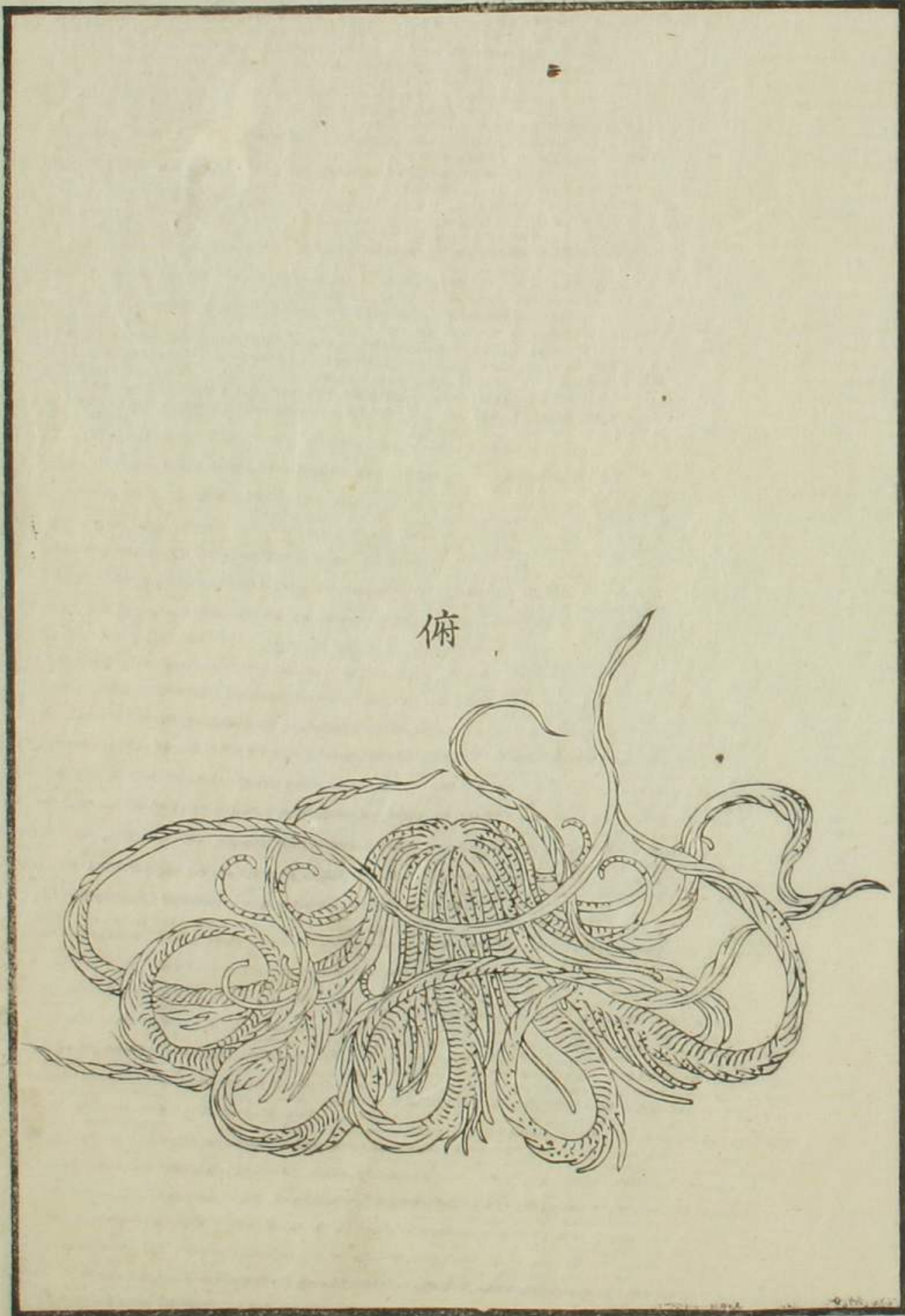
説は有、四脚といへを充らば、按は嶺南雜記に瓊州有、冬凡蛇大如柱而長止二尺餘其行跳躍逢く有聲螫人立死といふ、これ野槌蛇なるべし、○千歳蝮ハ詳からば本草啓蒙尔信州戸隠山ハ高クメ雪深ク、六月ニ非ザレバ登ルベカラズト云其神社ヨリ奥ニ三十余抱ノ珍シキ大松アレバ、六月比ハ山カバシト呼ブ毒蛇アリテ人ヲ害スルヲ畏レテ登リ見ル人稀ナリ、其蛇ハ四足アリテ石龍子ノ形ニ似タリ、人聲ヲ聞ケバ後足ノミニメ立テ人ノ来ルヲ待ツ、若螫ルレバ毒猛ケ

レバ、蝮蛇ヨリハ輕シト云フ、此類ナルベシといへり

手蔓藻蔓

橘菴漫筆ニ編尔事多端、一々繁く又衆議區々に、一々変談一がとき時や、手づるもづるといへり、いり形は事よやと思ひ、一に攝州兵庫の西高麗が林の沖の海底より手蔓藻といふ者出る、近頃和蘭人は是を知り求め歸るより、藥能ありと世に用ひ覚えたり、これと採ハ九月と時といへり、按は手蔓藻蔓ハ一名海

牡丹シワヒトテ、本州マツダコ、同テンズモンズ、同シ



手蔓藻蔓



ヤグマ 同日 北浦 シヤクシヤグマ 同加太浦 天蔓藻 同若手蔓

藻 同 テンズモンヅル 同 テンツクモンツク 同 テンバ

同 上 テンパチ 豫州 ガラコ 同 ハナダコ 同 シウ 同 ツナツカミ

肥 前 ホ子ツギ 同 シヤクシヤラノツカミ 讚州 ノウツカ

ミナルカシラ 房州 バンシヤガヒ 尾州 形状圖の如く海中

よあり能蠕動凡大三四寸許赤黄白の三色あり

本草啓蒙尔末ト為テ酒ニテ服メ胸痛ヲ治ス又煎服

メ疝ヲ治ス又生ナル者ヲ末ト為シ酒服メ打撲瘀血

アル者ヲ治ス又足ヲ取リ焼性ヲ存メ酒ニ服シ或ハ

末トナシ米飯ニ和シ傳ルモ可也といへり又撰州大

阪ヨク全ク焼く霜とあしこきを天鶴霜と名け售る

痰咳を治するも妙也と云これ本草原始の圖なる所

の海盤車の屬なるべし

都鳥

萬葉集云布奈藝保布保利江乃可波乃美奈伎波爾伎

為都々奈久波美夜故杼里香蒙と云えあるとほづわ

く伊勢物語云なほゆら武藏の國と云もほふ

やの國と云中云いとおほきなる河ありそれす

此

多河といふ。中志ろ記より此とありとありき。志
 記のおや記される水名やうおそむつ。いそく
 ふ。京尔ハ見えぬよりかれき。みな人えし。は。初め
 をりにいふれば。これやん都鳥といふとき。名
 う。お。い。ば。こ。う。ん。み。や。こ。ど。り。わ。が。お。と。ふ
 人ハ。ありや。な。を。と。云。阿佛尼が十六夜日記尔尾
 張のくに鳴海の瀉と過るに。中志ろ多河のそりよ
 こそありと記し。かど。都鳥といふ鳥の。は。と。あ
 と。赤。き。ハ。此。浦。も。有。り。ふ。と。う。ん。背。と。足。と。ハ。何

りざりし。まのともむか。の。や。こ。ど。り。も。此。外。古。歌
 多。大。抵。ハ。藤。原。長。清。が。夫。木。和。歌。鈔。契。冲。が。勢。語。臆。斷
 尔。載。ま。バ。あ。り。畧。と。海。尔。も。河。も。濱。尔。も。又。色
 ハ。志。落。く。嘴。と。足。と。は。赤。き。よ。い。へ。る。り。多。予
 按。都。鳥。ハ。諸。説。紛。こ。う。一。を。下。學。集。尔。鷗。日
 本。所。謂。都。鳥。者。歟。といひ。臆。斷。お。よ。び。季。吟。が。伊。勢。物。語
 拾。穂。抄。真。淵。が。伊。勢。物。語。古。意。千。蔭。が。萬。葉。集。略。解。ち。と
 小。鷗。と。セ。り。本。草。啓。蒙。も。此。説。尔。從。ふ。ま。近。年。高。田
 與。清。十。六。夜。日。記。殘。月。鈔。と。著。し。鷗。と。こ。も。此。説。千。古

不易ふえきの確論くわくろんなるべしといへり。鴉カ品類ひんるい多し、本草啓蒙ほんそうきもう詳くわふさればあぐりのせは、都鳥みやうとい、野や必かならず大おほが本朝食あさけ鑑かん小曰、京師歌客語予曰、伊勢物語都鳥者鴉也。京客不知鴉鳥カ據其形閑麗けんれい以有美夜称予未知其真偽焉。とこれあほき鳥の嘴くちばしと足あしを赤あかくみやびある貌かたち也。るう、ミヤコ鳥といふとれ説なり、殘月鈔ざんげうハ、本草啓蒙ほんそうきもう鴉カを子コドリ前子コサギ後海子上コハマ子武とよぶといへり、こ終鳴聲なげこゑの猫ねこは似にたるが也。也。源氏げんじの若菜わづなの下したに、猫ねこ糸いとううといとらうとげよか

けむと有あ今いま打うきくくににニヤウにやうくとなくが如ごとく鴉カもミヤくとなくさ色いろの子ウこくともニヤウにやうくともうといとさこそさ猫ねこのいろ色いろいと近ちかければ、某猫あるねこといふ名ともよびよかり、さう都鳥みやうのミヤハいろ色いろよりてねがせ、コドリとよぶことりとらごどりなごの小鳥こどり同おなトく大鳥おほどり対むかへむか称ななりといへり、ミヤコドリの義ぎ両説りょうせとのににとらなりなりは猶なほ考かんべし、又都鳥みやうといへり、鴉カと書かひ此字このじを考かんるに字書じしょうええは、勢語古意せごこい鴉カの字このじの草書そうしょより誤あやまるまるものなりといへり、以上鴉カと都鳥みやうと

此也 ○古今著聞集院御隨身右府生泰頼方々やと

りどある殿上人尔ゆひせある成季尔あけけ

られ侍りくひ物などもあつてよ海づの夷とくい

せ侍も所せくおほえと申しきわのりいなるによ

り小田河美作茂平がりとへやりりハせ侍り

のこと所載とりこれハ何物とささく都鳥とゆるり

詳ありぬ ○大和本草に或鴨ヲ以為都鳥未知是否今

按西土ニテ都鳥ト称スル鳥アリ背ハ黒ク腹脇白ク

嘴ト足ト赤シ嘴長シケリノ形ニ似テ其形ウルハシ

伊勢物語ニイヘル都鳥是ナルカといひ筑前續風土

記ニ都鳥嘴足赤シ白黒斑ニテ大サハ其形ケリニ似

タリ此鳥伊勢物語ニ載タル都鳥ニヤ決シガタシ香

推ノ瀉ニノミアリといふこまハ筑前の方方言乃都鳥

まゝ真物うハあつて本州へも稀ニ来る鳥まゝ方言

黒ドリといふ水雞の一種ニ黒ドリあり又土佐 ○寺

島良安の和漢三才圖會鴨を出せる外都鳥正字名

義未詳大如鷓鴣白色唯嘴與脚正赤關東多有之畿内

未有之人亦不食之有業平視都鳥於隅田川之語とい

へるはうけがめ、都鳥ハ、これ鴟カササギの屬なひなることばらう
 びし、伊勢物語いせものがたりに據よる、妄あやまりに書かけり、のなるべし
 ○直海龍ちかみりゆうの廣大くわいだい和本ほん草そうニ、駿州すんしゅうニテ土人どじん呼よぶ都鳥ト
 云モノアリ、梟カモアヒ鷹トビノ屬也といへるハ何物なにものヲ詳あらうべし。
 此書このしよ杜撰だせん多おほクバ信しんじんべんぐんべん ○和訓わくん栞し後ごニ都鳥みやと
 ハ、一説いっせつニ鴟カササギの事也といへり或ハ鸚鵡カササギ也といへりと
 おり、此鸚鵡カササギニ充あるハ大おほなる誤あやまり ○齋藤彦磨さいとうひこまろの勢せい
 語圖說抄ごづていせうニ都鳥みやとの歌代うたしろの集しゆにあまゝおれど皆水みなみづ
 鳥みやととよめる也、そが中なかニ、宇津保物語うづほものがたりニ名ならうあふ、關せき

と越こへ、都鳥みやと声こゑなるかゝを百ひゃく一いちきい、又六帖むつてつノ
 免めんづゝゝゝ、鳴なもさある、都鳥みやといづきのを、年としと一
 わらん、まび人の住すふるや、都鳥みやと音ねづき、あえ、
 年としぞへまゝなる、水鳥みづとりとの、いひ、
 思おもふ、ミサゴ鳥みさごとりハ、あ、さ、と、ヤ、と、相あ通う
 ふ音ねなり、和名わなな鈔しやうニ、雉けい鳩と和名わなな美佐みさ古こ鵬ほう屬也、好在た江邊えのへ
 山中やまなか亦また食た魚い者もの也、とおき、水邊みづべの、山林さんりんも
 住すり、と、也、又また万葉集まんやふしゆニ、佐さ夜や誤あやマリハ、あ、ら、う、ご
 ろり、字體じたい能よ似にたりとあり、予友よとも加納かの諸平もろひら云い名ならうお

ふまゝにこれら此歌をよみ、都鳥ハ海邊をうごも、山中
 のと啼く證ヲ引るゝハ誤なり、こハ院の帝吹上の
 宮より、あへらぬゆゑなり、吹上の海邊より、彼鳥のな
 くよとよみたる哥の中なり、關とよ越トとよめる
 ハ白鳥ハ關の事なり、委ハ宇津保ハ吹上下の卷と開
 らるべし、よや白鳥の關とよの哥なりとも、彼あ
 り海邊より近れを、此鳥の行々々々ことちやひむ
 よあ、今も山口の驛をどよ、りくくをめれうよ
 ふより也、又美佐古どりな、んといへるも、甚トきいぢ

事なり ○本草正偽ハ本朝食鑑ニ、鴉ヲ都鳥トス、大ニ
 誤レリ、鴉ハ大サハ大サ、鴉ノ如ク、灰白色ニメ、觜足俱ニ黄ナ
 リ、都鳥形小ク、メハメ、如シ、翅ハ白ク、黒点アリ、觜足共
 ニ紅ナリ、尾州鳴海邊ノ海濱ニアリ、都シギト云、阿佛
 十六夜日記ニ、鳴海ノ浦ニシテ、都鳥ヲ見ル歌アリ、是
 ニ合ヘリ、武州ノ海邊ニモ有之、野必大ハ東都ノ人ナ
 リ、隅田川ノ都鳥ヲ辨ゼザルハ何グヤといへり、此説
 是ニ似々反々非なり、鴉ハ前々もいへるごとく、品類
 多し、江鴉ハ江鴉、多ハ觜脚赤、驚鴉ハ驚鴉、多ハ觜脚黄なり、又

淡黒色のものあり、黄と限るべりらば、又都シギハ勢
 州及び熊野海辺にもあり、濱シギともいふ、此鳥を以
 る都鳥と充るよりハ本州海辺所々々々、方言紅カ
 モメといふものあり、春月ハ細鱗魚の子と追々紀の
 川上へのびり、鴨と交り居る、鴨の屬ルル形鴨より
 小く味脚共々朱色、全身白色小く捕へしれを粉紅
 色のものあり、至々美なり、勢語の文と能合へり、按
 清異録云、隋官者劉繼詮得芙蓉鴨二十四隻以獻、毛
 色如芙蓉といひ、清の周櫟園が閩小紀云、莆田九鯉湖

中、鴨作粉紅色、嬌艶異常、又明の謝肇淛が文海披
 へるも此屬なるべし、實云々ヤコドリハ鴨の屬云々、
 中トより居るものなれを、鴨といろくく、説稔なれ
 ども、鴨ハ古くよりかきぬといふ名あり、都鳥とは
 いま、形状中ことに紅カモメと似多き、これ都鳥
 なること疑なく、和歌者流秘事口傳などことごとく
 いへを今詳に辨じ、也。

桃源遺筆附録終



桃洞遺筆

小原桃洞先生遺編

自二編至五編同 蘭峽先生輯錄

各三冊 追刻 鹽路鶴堂先生畫圖

天保四年癸巳仲夏刻成

若山新通二丁目

帶屋伊兵衛

全三丁目

總田屋平石門

全中之島

阪本屋喜一



發行書肆

